

部落問題文芸・作品選集

第48卷

村井弦齊 川崎大尉

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第四十八卷

定価は箱帯に表示

昭和五十四年十二月十日発行

定価二〇〇〇円

発行者 松本 明

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二丁目一五丁152

電話 〇三(七一六)六一五一(代表)

振替 東京 四一七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

立身實談
川崎大尉

村井弦齋著

第一回

過ぐる明治二年十二月の事なるが、四ッ谷内藤新宿の天龍寺門前に小屋主藤八といへる者の所有せる非人宿あり、猿廻し、チヨボ繰レ、千ヶ寺、セキノ、なんどを始めとして其他種々なるムサくるしき厨の數多宿りけるが頃しも歳末の事として此社會にも亦た夫れ／＼の式あると見え何れも年の送り迎へに其の支度中々忙はしきものゝ如し、其中に此頃小屋入りしたる新參の乞食あり、母と子供の三人連にて一番隔りたる小屋に在り母は四十六歳の娘は十五歳弟は十三歳由ある者の零落たりと見えて皆人品卑しからず母は久しき以前より重き病症に悩み居り總身骨と皮ばかりに瘦せ枯れて長

く此世の人とも思はれず、況して二三日前より寒氣は一入増して血氣盛りの壯夫さへ殆ど堪へ難き程なれば益々病勢募り次第に弱はり行く有様に二人の子供は幼ながらも非人に珍しき孝行者にて兄弟共に深く心を痛め兎やせん角やせんとあせれども身に着けたる襦袢一枚の外何一つ被せるもの無く同胞二人泣く／＼雙方より肌と肌にて病母を温め我を忘れて介抱に心を盡し居たり、母は涙ながら顔を揚げ、お安や(假名)お前達は嘸寒いだらうのう、能く辛いとも思はないで苦しい中から此介抱を仕てお呉れだ、思へばイヂらしいやら悲しいやら、此胸が張り裂くやうだ、不甲斐ない私のやうな者の子に生れたのはお前達の不仕合だが是も前世の約束事と諦めてどうぞ勘忍しておくれと言さして涙を飲み、そしてお前達は今朝から未だ何も食べない様だが嘸お腹が空いたらう、それに屋根代(宿料)も今夜で三晩拂はないが如何したら宜からうお安や此寒いのお氣の毒だがの、乃母はモゝ温がくなつたから親方さんの處へ往てどうも言ひ難くからうが(と)少し

思案の牀にてよく譯を云て例の辻占の函を拜借するやうにお願い申して
 それを拜借したら今夜是から一つ廻ッて百文なり二百文なりお商ひをし
 たお鳥目(錢)でお芋でも買つて食べてお呉れと病苦の中にも子供の事を心
 配する娘は湧き来る涙を押し隠し「イエ、モウ先刻阿母さんへお粥を差上げ
 ました時私も六之助(假名)も戴きましたからお腹はまだ空きませんが昨日
 買った順氣散はモ一上げて仕舞ひ今夜の分が御坐いませんから兎も角も
 一つ廻つて見ませう、六坊や乃嬢は今直に歸るから其間和郎一人がよく阿
 母さんのお牀の冷えないやうに温めておあげと云ひ遣して甲斐々々しく
 出で行きたり、小屋主の藤八は商賣柄に似合はぬ信切者なりお安が事の次
 第を語りければ深く姉弟二人の孝心に感じ又其母の薄命を慰み是まで滞
 納の屋根代は取らぬ事として更に四百文だけの辻占豆を貸し興へ且今夜
 は雪も降り出したれば一人でも何分心細かるべし此邊では姉弟の辻占屋、
 瓢箪山の辻占屋と云ひ囃して人も顔を知て居るゆゑ弟と二人にて賣りに

出づる方が宜からんと注意しける、お安も成程と心嬉しく思ひしものゝ病に臥せる母一人を残し去る譯に行かず殊に今夜の如き厳しき寒氣に側で母の躰を温める者が無ければもしや萬一の事でもありはせぬかと親を案じる子心の彼れを思ひ是を想ひて當惑なる顔色なるに藤八それと察し「イヤ阿母さんの事は乃爺が往て居て世話をしてやるから心配しないで行つて来るが宜い」と手づから古き五巾布團一枚と破れ傘一本を持ち來り「外の者にねだられると困るから表向きは貸すとして内密で進げるのだ」悪くつても當坐の凌ぎに此の蒲團は貴母に被てこの傘はお前達が持て行くか宜い」と娘に渡しければ娘は大に悦び篤く禮を陳べて尙ほ呉れ「も母の事を頼み弟六之助を伴ふて辻占賣りに出掛たり、二人が出で行きし跡にて母は「ッット」一聲泣き出せしが病苦は愈よ募りし如し

此の三人は舊幕の黒鯉侍土川崎喜兵衛(假名)の後家と子供にて孝子二人が幾多の酸辛を経し後姉は立派なる家の夫人となりて今に生存し弟は

後に有爲の軍人となれるものなり

第二回

お安六之助の二人は雪の中を打連れて聲も高らかに「瓢箪山越し戀の辻占、エ、お名前づき戀の辻占」と新宿通りを上下掛けて呼び歩きしが六之助は立止り「チ、寒むく、姉さん一寸俵て下さい下駄の齒に雪の結團が着いて歩けませんから」オヤ和郎は如何したの、早くお出でな、寒いところではないよ、今夜は荒れるのでお嫖客のない故か先刻から未だ一も賣りやしないのに今ッからそんな事を云つては困るよ」と姉の言葉に六之助は勵まされて殊勝にも「チ、雨でしたッけ、ドレ一生懸命に廻りませう」と尙も勇氣を鼓して新宿の追分より大木戸まで十八丁の間を折り返し聲を嚔して觸廻りしが其夜は吹雪に寒氣さへ甚しければ浮れ来る客もなく茶引女郎も辻占を買ふの元氣なしと見え思ひの外の不捌けなるに二人は氣を揉み六之助

姉さん今夜は例の様に賣れませんか、姉左様さ、まだ漸々百五十文だけしか賣れない、セメテお薬一服だけでも賣れて呉れると宜いけれども六坊や今度は四ッ谷御門の方へ廻ッて見よう、ど幼き弟を勵ましつゝ再び聲を張り揚げて新宿二丁目より大木戸に向つて呼びあるき漸々仲町の豊倉屋(女郎屋)の前通りまで來掛りたるに向ふより木綿を積みたる小荷駄馬一ト筋の細き雪路を我物顔に勢ひ込んで此方へ走り來りしが姉弟は此の物音に狼狽へて道を避んどせし途端お安は下駄の鼻緒を切らして顛倒び石の角にてシタゝか膝を打ち「ア、いたゝ」と叫ぶ聲に弟は驚いて走り寄りしが無情の馬は知らぬ顔してサツサと走り行くお安は怨めしうに其の跡を見送りつゝ弟に扶けられて起上り足を曳ずりながら漸々豊倉屋の千本格子の軒下まで來り洩れくる燈光にスカシ見れば膝下二寸ばかり切れ裂けて鮮血夥しく溢れ出でたり弟は我身にても傷めたる如くオロ／＼泣きながら己が持ちたる半切同様の古手拭にて傷口を結ばんとするを姉は慌てゝ之

れを止め、和郎それを汚しては明朝から三人で使ふ手拭か無いよ、弟ダッテ
 こんなに血が出ますもの、如何したら宜いだらう、と二人で途方に暮れ居る
 處へ向ふより此方を指して來りたる職人、男あり、年頃廿歳前後とも覺
 しく服裝のチヨット小意氣なるは、花街通ひの者ならん、滅法に寒い晩だ、雪
 まで人を馬鹿にしやがつて下駄の齒へ固まりやがる、と豊倉屋の前なる用
 水桶の臺にボン／＼下駄を打て雪を落せしが、フト傍らの二人に目を着け
 「チィお前達は其處に何をして居るんだ、ヤ、泣いて居るな、一舂如何したの
 だ、ナニ今馬を避けて怪我をした、ヤレ／＼可哀想に、血が大變出て居らあ早
 く拭きなせい、泣いてばかり居たつて仕方が無い、ナニ拭くものが無いと己
 がナニカ拭くものを呉れてやらう、と懷中へ手を入れながら、乞食だつて人
 でなしじやあるめ、し、痛い事は皆な同じだ、己が新で足をスツバスツタ時
 の思ひをすりやあ可哀想でならねえ、ヤ、それで思ひ出した彼の時貼けた
 創薬が此中に在ったツけ、ウン有る／＼と懷中より藥を取出し、ソーレ是を

貼^つけてソシテ此^{この}手拭^{てぬぐひ}を二^{ふた}ツに裂^きいてキチンと縛^しつて置^おくとモ一^{ひと}直^ちに癒^{なを}るよ、イヤ此^{この}手拭^{てぬぐひ}は使^{つか}ひ上^ありで人^{じん}間の膏^{こう}氣^きが浸^{しみ}て居^ゐるから毒^どになる此^{この}方^{うち}の新^{あらた}しいのを進^あげよう」と親切^{しんせつ}に慰^{なぐさ}め呉^くれたり姉^{あやう}弟^{たい}は思^{おも}ひ掛^かけなき人^{ひと}の情^{なさ}けに嬉^{うれ}しさ餘^{あま}ッて言葉^{ことば}も出^いでず二^{ふた}品^{しな}を押^お戴^{いた}き指^{さし}圖^ずの如^{ごと}く傷^{きず}處^{しょ}に手^て當^あてをなさんとすれど寒^{かん}氣^きに指^{ゆび}頭^{さき}凍^こえて自由^{じゆう}に動^{うご}かず若^{わか}き男^{おとこ}は之^{これ}を見^みて益^{ますます}々^く不^ふ憚^{げん}に思^{おも}ひ自^{みづか}ら手^てを下^{くだ}して藥^{くすり}を塗^ぬり巾^{きん}を卷^まき杯^{なぞ}して丁^{てい}寧^{ねい}に手^て當^あてを爲^なし還^やりぬ職^{しよく}人^{じん}だけに言葉^{ことば}遣^{づか}ひこそ荒^{あら}々^くしく聞^{きこ}ゆれど中^{なか}々^く心の眞^{しん}實^{じつ}なる人^{ひと}よと言^いひ合^あはさねど姉^{あやう}弟^{たい}はそいろに懷^{うち}かしく思^{おも}ひ我^{われ}知^しらず其^{その}人^{ひと}の顔^{かほ}を見^み揚^あぐれば此^{これ}方^{かた}も首^{くび}を傾^{かたむ}けて上^{うへ}より二^{ふた}人^{にん}を覗^{のぞ}き居^ゐる若^{わか}き男^{おとこ}は以^い前^{ぜん}より此^{この}二^{ふた}人^{にん}の樣^{やう}子^すを見^みるに言^も語^ごといひ振^{ふる}舞^{まひ}といひ其^{その}他^た一^{いつ}體^{たい}何^{なん}となく上^{じやう}品^{ひん}なる處^{ところ}ありて尋^{なみ}常^{じょう}の乞^こ食^{じき}に似^に合^あしからざれば由^{よし}ある人^{ひと}の落^おちぶれたるならんど心^{こころ}に訝^{いふか}り「お前^{まへ}達^{たち}は同^{どう}胞^{ぱう}だな兩^{りやう}親^{しん}は無^ないか」お安^{やす}「ハイ母^{はは}が御^ご座^ざいますが病^{びやう}氣^きで寝^ねて居^ゐります」と荒^{あら}増^{まし}を語^{かた}る側^{そば}より弟^{せう}の六^{ろく}之^の助^{すけ}は頓^{どん}着^{ちやく}無^く「だからお藥^{くすり}を買^かつて飲^のませ

度いが此の大雪で些つとも賣れませんが旦那辻占を買つて下さいなと無邪氣なる言葉に若き男は何思ひけん腹掛のドンブリより太政官の通用紙幣なる壹分札三枚を取り出したたり、

第三回

若者は一分札三枚を二人の前に出し「あゝお前達の孝行話を聴て始めて目が覺た、一躰私は職人だがフトした事から朋輩に連れられて女郎買の味を覺え、それから仕事も手に付かず毎晩の様に内を外にして榎美濃屋のお久米といふ女に熱くなり仕舞には金に困つて兩親や親方を誑らかす様な始末さ、今夜だつて雪は降るからお久米の處へしけ返むつもりで此の三分の金も親方の留守におかみさんをひまかして實のお袋が急病だと嘘を吐いて借りて來たのだ、同じ人間でありながらお前達は見るかげもねへ乞食同様なありさまでも心の内は實に立派な親孝行、己れなんぞあ立派な男一

人前だが、なんたる事だらう親を養ふ處か、親や親方を欺して女郎買ひ其の淺ましい心は乞食にも劣る、モ一女郎買はお前達二人を手本として此れつきりブツ、リ止めた、やめりやあ此の金はモ一入らねへ、いらねへものなら親孝行を助けると云ふ役に立、せりやあお蔭で此の三分も生かへらあ、さあ此の金を持つて行つてどふぞ阿母さんを大切に、して遣んなさい、と金をお安の膝の上になげつけて行かんとすお安、六之助はともに驚き、何處の御方か存じませんが御藥を頂戴して其の上ならず勿躰ない檀那樣に足までしばつて頂きました夫れはつかりでも御禮の申しようが御座いませんのに又々澤山の御金をどうしてこれが戴かれませう是を戴いて歸りますと物堅い母に叱られます、母を怒らせれば却て不孝になりますからどうぞ二人を助けると思し召て此の御金を仕舞て下さい、何卒御願で御坐いますと只管に辭するに職人は聲を勵まし「馬鹿な事を言ふなえ、べらぼうめ江戸の職人だ、宵越の錢を持たねえ己だ、出したものが引込まされるか」と猶ほ突き

付けて止まざるに、今はお安も痛さ寒さを打忘れて頻りに辭退し、どうして
も下さると被仰るなら此に四百文賣あげて八百文になる辻占豆が六百五
十文丈けありますから折角の御思召に是れを買つて下さい御身分も分か
らない見ず知らずの御方に御慈悲とはいひながら三分の金を只頂戴は出
来ませんと押問答する、六之助は傍より情を張る姉に向ひ「姉さん、姉さん
があんまり情を張つて戴かないので此の旦那は少しお怒んなすつた、いた
かないとわるい、ヨ、姉さん斯んなに被仰るものを阿母さんが怒つたら私
が一生涯命にあやまるからいたいてそうして薬を澤山買て早く阿母さ
んに好くなつて戴きませう、ヨ、姉さん」といふを職人は聞いて喜び「どふして
も男は男丈で年はゆかねえでも分別が違ふ、中々強勢な餓鬼た餓鬼どころ
じやねへ御子供さまだ、そふして御まへ達の居る處は何々天龍寺門前小屋
の藤八の處だと夫れでは乞食宿だなお前達の名はなんといふのだ、六之助
「ハイ川崎六之助といひます姉さんは川崎あやす男なんだと強勢な乞食だ

苗字付だ、な、そうして見ると徳川様の御家人か、姉ハイ誠にお羞かしいと、赤らむ顔を破れし袖に隠しつゝ、頻に職人の顔をのぞき見る心の内には何事を感じけん、おやすは恥しそふに、貴下は何れの御方さまで御名前はなんと被仰るのですか、母の全快しました上は是非御禮にといふを男は「禮なんぞあ宜いから早く歸つて藥を飲ませなさい、己れは麴町の勘助といふたゝき大工だ」と言ひ捨てゝ大木戸の方へ歸り行く姉弟は其後ろ影を伏し拜みしが降る雪に姿の見えずなりし時、お安は思はず「アゝ頼もしい人だぞ、獨言、今此薄命なる二人に金を恵みし若者は後に海軍〇〇〇の榮職に登りたる野畑勘助氏（假名）なり」

第四回

お安六之助の二人は三分の金に氣を得て疵の痛みも足の疲れも打忘れ早く藥を買つて母に與へんと近所の藥種屋に至りしに雪の夜とて藥種屋は

早くも戸を鎖させり、六之助は表より戸をドン／＼と叩きて「モシ薬屋さん
順氣散を二服と實母散を三服計りお呉んなさい」と心急くまゝ大きな聲に
て呼びけるに此時は維新後の殺氣未だ全く失せず警察制度さへ備はらず
して物騒なる世中とて藥種屋の番頭は小窓を内よりそつと開き雪光りに
表を透し見て「オ、辻占賣の小僧だね、ナニ順氣散と實母散だ、剛氣な買物だ
な」と云ひながら奥に入りて藥を執り來り「ソラ順氣散が二服に實母散が三
服、ナンだ一分の札でお釣りだと、和郎なんぞに一分の札とは大したものだ
が、ハテナ小さいお錢は無いかえ」六之助無いのだから早くお釣をお呉んな
さい家へ歸つて阿母さんにお藥を飲ませるのだよ急ぐのだよと少年の心
は早く家に戻り度し、然るに少年の急ぐほど當頭は尙ほ怪しみ「待てよ此節
は贋札が多いから油斷がならない、ドレ其札をお見せと手に執つて奥に持
ち行き行燈の前にて表裏を倩々と眺め居る、お安も心急がれて外より聲を
かけ番頭さん其のお札は今親方さんから借りたのだから大丈夫ですよ」と

證明するに藥種屋の番頭は漸く疑念を晴らせしと見え悠々と札を錢箱の上なる札落しの孔へ落としそれから下の拙斗を抜いて釣錢を數へ「ソラお釣りだ」と小窓の外へ差し出したり、六之助はヒツタクル様に受取り「姉さん、遅くならない内に早く歸りませう」と姉の手を引きて雪の中を歸り行く、お安は足の疵の痛さに折々途中へ轉ばんとしければ六之助は一々ドツユイと引起し「姉さん足が痛ければ負つて上げませうか」お安「ナニモ！ 大丈夫だよ先刻あの人に藥を貼つて貰つてから痛みは大層好くなつたが唯膝がガクガクするので、片手に膝を抑へ「ホンにあの人のお蔭でお藥が澤山買へたから安心だ、モ！ 二三日はお商賣に出なくつても家に居て阿母さんの御看病をする事が出事る、六之助は心に掛念する所ありだつて姉さん復た壹分の札で何かを買ふと今の番頭の様な事を云やがるでせう子」姉はホロリと涙を落し「昔しならば壹分の札でも二分の札でもズン／＼使つた身の上だが近頃はお鳥目より外かに見た事が無い、好いよ、六妨や其のお札は親方さ